

壹で慶応元年京都での権馬の生活などを紹介しました。その続きとして貳です。まず、壹の訂正、追加、その後を紹介します。

安岡権馬正徳 壹 に追加・訂正

養子となった時期からの安岡権馬正徳を紹介しました。その資料を見直して、訂正、追加すべき項目がありました。

家来と従者 山本四郎に託した手紙

道中日記に権馬は京都へ向う時の届けに自分、同行者として従者 山本四郎、家来 鉄次の三人で三人扶持を要求とあります。山本四郎は権馬の妻の実家 山本安次の二男です。この山本四郎は従者、鉄次は家来、従者と家来の違いはどこにあるのでしょうか。その後の日記を見ると従者の変更は上司に届ける必要があるようです。家来は従来から家で雇人のよう、一年分の給金を支払った記録があります。その家来まで扶持要求し、支払われるのは不思議です。この鉄(鐵)次は覚馬の根居帖などに名が出てきます。鉄次が作った文机(下写真 文机で裏返し撮影)に「干時西洋起元ヨリ一千八百七拾四年／明治七年 四月廿九日／我神武天皇即位紀元ヨリ二千五百拾四年／香美郡第七区山北村四坊／作之 大工析内鐵次／安岡氏」とあります。明治も雇われていたようです。



山本四郎は解雇され、高知へ使者として戻ります。単なる手紙であれば飛脚で事が足りると思うのですが、どのような手紙を持ち帰ったのでしょうか。

この時持ち帰ったのは手紙でなく、宮地佐一郎著「中岡慎太郎」に檄文として原文及び状況が記載されています。次にその一部を引用します。

「天下の浪士結集して『六月十日』『報効之忠』を挙げようとするを告げ在郷土佐同志に上洛を促し奮起を伝得ている。さきに水戸藩士藤田小四郎らの筑波山拳兵があり、將軍家茂の江戸帰還、諸大名京都退去の際で、この虚を衝いて義兵をつのり、同志大挙して尊攘勢力を挽回しようとしていた。」そして檄文は五月十一日付になっています。この話をした時の状況が、前も紹介しましたが、道中日記元治元年五月十一日に次のように書かれています。

「存外時勢之話ノ無キ成実ニ案外之事ニ付・長邸江行誠之助我邸内之論同意ニ付・」。左記の檄文に関連し議論をしたのでしょうか。権馬は同意しているが、その後禁門の変を含め実戦行動を起していません。このことが、前に紹介しました次の歌につながるのでしょうか。

いたるる□□紅葉の／舞も見はてぬ身こそはづかし

前述の従者の話題に戻りますが、権馬は誰の下、誰の従者だったのでしょいか。道中日記では最

初の宿泊が山田になっています。参勤では城下を出て、布師田で宿泊しますので、この時は家のある山北辺りから出て、誰かの従者として京都へ上ったようです。後半に口上書覺(下写真)で最後に福岡宮内とあります。この宮内は福岡孝茂の通称で、清和院門の警護責任者の経歴もありますので、福岡の従者になるのでしょう。維新に活躍した福岡孝弟(藤次)は類族です。

池田屋事件と禁門の変付近の行動

前述の通り、参戦出来ず無念と思つた権馬の池田屋事件(元治元年六月五日)と禁門の変(元治元年七月十八日)の頃の権馬の行動を日記から追ってみます。左記の／は原文の行替えを示す。

六月二日 因州松田正人を尋／夷舶襲之義委細聞

／七ツ比帰邸后御目附へ出

*夷舶 夷舶とはロシア船

*御目附とは上役である福岡孝茂カ

六月三日 清和院出勤

*門番勤務

六月四日 板筑ヲ尋不居合出井ヲ尋／不居合大高を尋折□筑藩人と

／参折談シ帰

*板筑 板倉筑前介、出井不明 大高は武器商で尊王攘夷者の出入の店

板倉筑前介六月十六日に再訪して対談。

因州の松田正人なども対談

六月五日 北邸へ行大論方

*北邸とは前に「薩摩邸でしょうか」と書きま

したが、北白川の藩邸、後の陸援隊の屯所と推

測します。ここで朝まで論争していますが、何を論争したのか不明です

が、そのお陰で池田屋事件の難を逃れています。

六月廿四日 清和院勤當／今日長藩土伏水(*見カ)江来越／二而當邸方も人数稻荷／山へ出張可・

*稻荷山伏見神社の山

*禁門の変は七月十八日ですが、その兆候は既にあった。

土佐藩の出兵は薩摩藩からの誘いで以前に出兵していたのか。

七月三日 對州へ行今日飛／脚立諸家建白を國許へ／出ス

*對州 対馬藩

*「飛脚立諸家建白を國許へ出す」について

権馬は外部の動き吸収のため次の建白書を写し残しています。

・上郷正親町大納言 文久三年五月廿五日

・筑前より建白

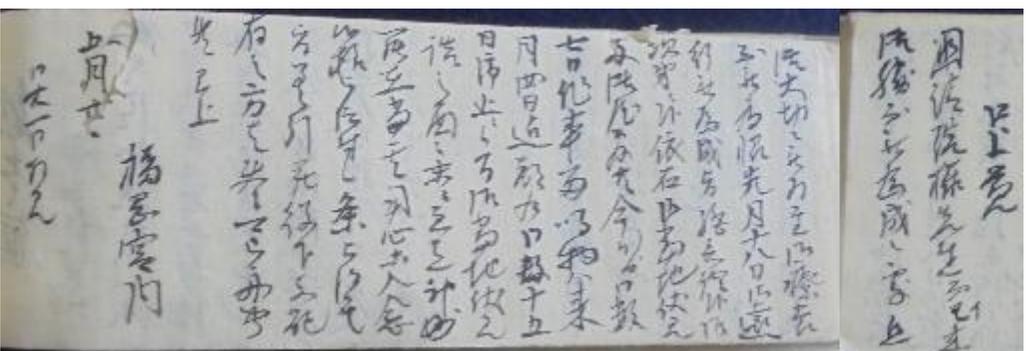
・因州侯方建白之写

・薩建白写

・肥後有志建白魚住より差出

・勅書写 朕惟分今時勢夷戎恣猖獗幕吏

・失措置天下騒



・肥後有志建白魚住より差出・西郷建白

七月五日 帰邸今日愚存書取を以政莊江出

七月十八日 ・乾方出建白手二入比夜余熱酔／帰邸否改罷出建白之面

／を以頗議論至終二夜ノ八ツ／比之家二入否砲(*火へん)声聞夫方清

／和江詰ル蛤門堺町門戦争／砲(*火へん)五□之如クトキ時ノ声如雷且

／突合切合実ニ猛虎之如荒・

*宮地著中岡慎太郎にこの時中岡慎太郎は長州軍に組し負傷とある

*乾の建白書 乾 正厚(まさひろ) 板垣退助家の分家乾左八正春の養子

六月廿四日久坂は長州藩の罪の回復を願う嘆願書を朝廷に奉り、

長州藩に同情し寛大な措置を要望する藩士や公卿もいたが、

薩摩藩士吉井幸輔、土佐藩士乾正厚、久留米藩士大塚敬介らは議して、

長州藩兵の入京を阻止せんとし連署の意見書を同七月十七日朝廷に

建白した。(インターネットより)

七月廿二日 火焰静ル

七月廿五日 清和院御免警衛ノ之數不残下坂僕日延以ノ可居残

七月廿六日 九ツ時出足島淀對ノ邸ヲ問一人モ不残帰国之起ノ否高瀬ヲ下ル夕方伏見着・

この日記からは権馬が禁門の変に長州側で参戦しなかった理由は解りませんが、乾建白に賛同したように見え、砲声などに胸が躍ったとは文書からは見られません。

中岡慎太郎は参戦し負傷しています。宮地著「中岡慎太郎」に長州藩は尊攘回復のため諸国の探索のため有志を往復させており、中岡慎太郎もその一員で文久四年正月に上洛し公武合体派の薩摩の動きを探索していたとあります。

懷徳堂

京都を去り帰国する前に権馬は懷徳堂に入塾したのではないかと前書きました。襖の下張りの切れ端ですがこんなことが書かれたのがありました。

従大坂一筆致啓上□ヲ以於有事之

去□

故御平安ニ可被成御□様子之と存候

□(野)□事毛ル(介)□在坂毛(も)他事

勤可子(勤めかね)

相可、里候只今ハ中井先生

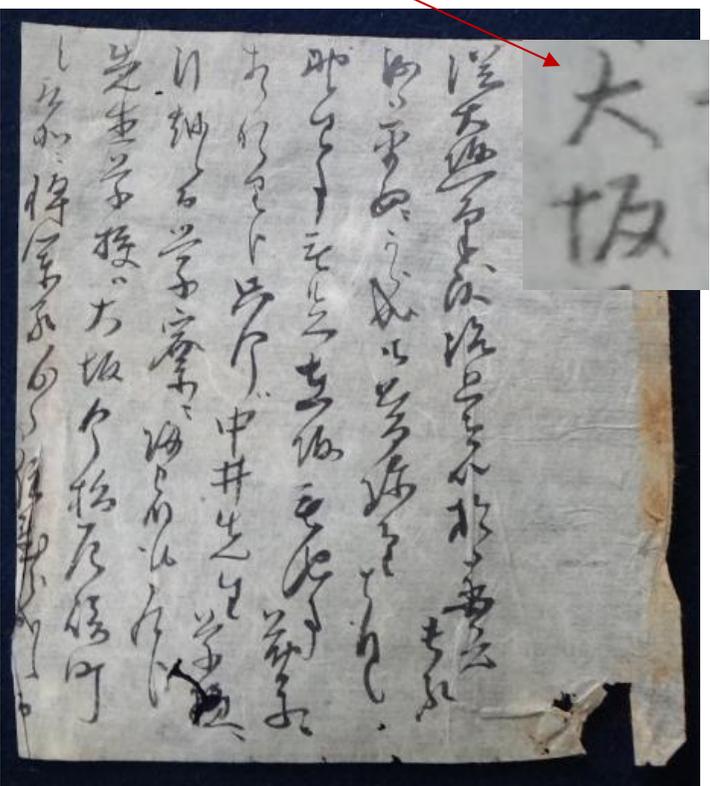
学■

行納ニ而学寮ニ滞宿致居候

先生学校ハ今橋尼崎町

候其処ニ將軍家方住置被成候■

発信者名、宛先、日付が切れて不明ですが、状況から権馬が大坂で塾に入った頃の手紙と推測しました。が、日記の大坂の字が手紙のと異なっているかに見えます。



インタネットで懐徳堂を検索した結果を追記します。「最後の將軍云々はこの学問所懐徳堂が1726年將軍徳川吉宗と三星屋武右衛門ら町家五人衆との援助で、中井贅庵(しゅうあん)が大阪尼崎町に建てた半官半民の学校。三宅石庵を学主とし、五井蘭洲らを助講として開き、全国の子弟を武士・庶民の別なく入学させ、主に朱子学を教育した。」この記載と手紙の中井先生、学校の場所の「今橋尼佐喜崎町」が一致します。

なお、この大坂滞在の時期の日記にサイ代とあったのは惣菜を購入したと思われる。右の手紙に学寮に二滞宿とありますが、食事は自分で作ったのでしょうか。

帰国後の動き

再掲となりますが、京都から帰国した前後は次の通りです。

一文久三癸亥六月十四日海防小頭役被仰付

一元治元甲子三月廿五日京都御警護御用相蒙り四月五日北山通出足同年十一月十六日帰宅

一元治二乙丑三月十四日海防小頭役被仰付

権馬二十五、六歳の頃です。これ以降のことはこの記録(帖)

に記載はありませんが、約二年後の慶応二年十一月からまた京都へ行きます。その間、「元治二乙丑三月十四日 海防小頭役被仰付」とあります。これがどの程度の公務か不明ですが、郷士として積極的ではありませんが、農業経営を行っています。

その一端を見るのが慶応二年権馬筆日記帖(下写真)です。これは東座の壁の中から出てきました。東座に床の間を追加したのは明治後半から大正に掛けての改築です。

冊子は三十頁にも満たないものです。内容は米座の頁に米を渡した記録、時貸の頁に現在のアルバイト時間の記録、他にワラ、ヌカ、茶とか購入、田仕事を割り当てた人の仕事役数の記録です。資料の紙が薄く、家に残された農業経営帳簿の百数頁の根居帖に比べ頁数も少なく片手間の資料に見えます。もしかして、大規模に農業経営をしていなかったのでしょうか。

この資料に農業経営に関係ない次の記載がありました。興味を引いたので紹介(左写真)します。

黒岩

一虫下水炎 □□ 七月十九日廿日

煎茶四帖

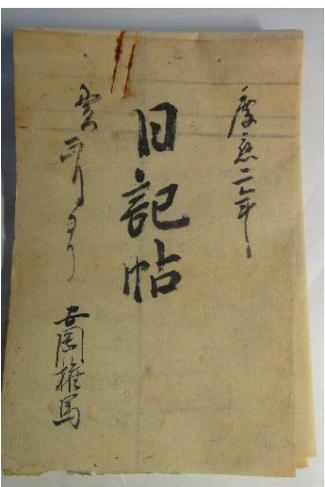
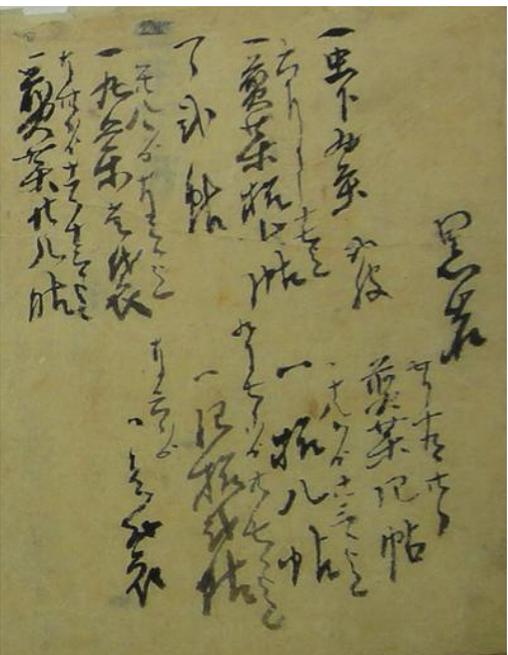
六月□十七日 十八日方廿三日迄

一煎茶拾□帖 一 拾八帖

.....

*虫下水炎 虫垂炎カ

記載者権馬とあり気になったのがもう一つ(次頁右写真)あります。そこには「慶応二年寅十一月差出安岡権馬領知御作式・逆川村新田・私領知賣渡御□奉行所」とあります。私領知賣渡の奉行所への届です。前述しましたが、慶応二年十一月に京都へまた行きます。そのための資金作りのように思えます。



安岡権馬正徳 京行雑記

安岡権馬が京都へ再び行ったときの日記に京行雑記があります。ここには慶応二年十一月十五日出発から慶応三年五月二十三日までの行動、金銭の記録が記載されています。前の道中日記のように何の用向きで出掛けたかの記載はありません。

出発と主従

慶応二年十一月十三日実弟覚馬が亡くなっていますが、十五日に発足しています。この旅が個人的な用事でないから遅らせることなく出発したのだろう。最初の宿が布師田となっているので、山北発でなく高知城下から出掛けたのである。同じ日に容堂の命で小笠原唯八、福岡藤次(孝弟)が上洛している。これを繋げると、安岡権馬はいずれかの従者として京都に向かったと思われる。清和院門警備の時に福岡孝茂に仕えていた関係から福岡の従者に採用されたのだろうか。

十一月十七日 卯下刻発足／今日好天氣酉ノ刻川口ニ至ル宿
十一月十八日 一老歩之 川口飯料／但主従五人也布師田も

／同数

これから、五人連れの旅で主が小笠原、福岡の二人と従者が三人である。この後も金銭出し入れの記録が細かく、金銭の出納を任されているように見えます。主従五人以外に

十一月廿六日 一老分老歩／新作殘金／一老歩 兼太郎同

とか名が出て来るので従者以外に家来も連れていた可能性はあります。

十一月廿七日 晴風巳ノ上刻伏／水(*見カ) 二着申ノ刻京着
十五日発足から十二日間で京都に着いています。

到着後、火箸、炭、薪、椀、皿、米、サイ(惣菜)などを購入しています。京都は前の藩邸でなくどこかの住居で合宿生活だったようです。

行行筆記と京行雑記Ⅱ要人と会う

権馬の京行雑記と同じ時期に中岡慎太郎が書いていた行行雑記と呼ばれる日記があります。京行雑記に中岡慎太郎(変名 石川清之助)と会うことが、書かれていますが行行雑記には福岡、小笠原レベルの名前のみで従者の名は書かれていません。例えば

京行雑記(次頁下写真の赤↓先が該当)

四月四日 晴今日も石清二會ス

行行筆記

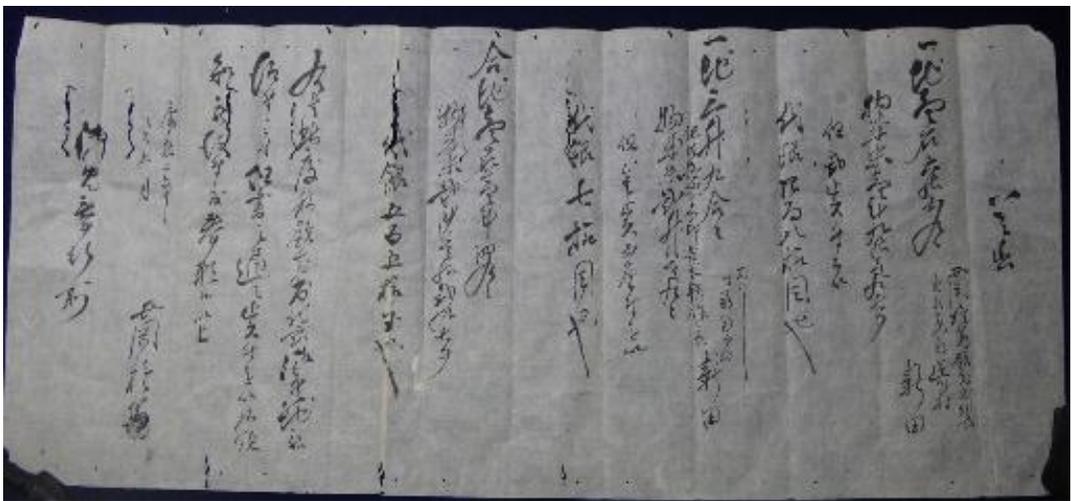
晴、已上寺田舗に著し、午後著京、小笠原氏に逢急務を談す。

京行雑記

四月五日 晴今日も石清二會ス

行行筆記

晴、内田、新納に逢、午後小笠原氏に逢、



どうも、中岡自身、自分は土佐の重臣と同等レベルと想っていた、あるいはそのような待遇だったのではないだろうか。それは何故か確証材はありませんが、京都到着直後、中岡慎太郎と福岡が会う場面があります。

京行雑記(下写真の青↓先が該当)

十二月朔日 晴整(*清)之助/□り発途智積院江行

行行筆記

比夜諸探索供供武亭に至り別酌す

京行雑記の記載から中岡慎太郎の呼び掛けで会いに行き、会った場所名が両日記では違っていますが、同じ日ですので会ったと思います。中岡はここで「諸探索供供」と京都に着いた福岡達のことを呼んでいます。福岡は容堂の命で出掛けていますので、そのことが脱藩者である中岡が何故知っていたのか。それなりの情報のルートを持っていたのだと思います。

中岡慎太郎とか、坂本龍馬が他藩の重臣と会うことができたか不思議でした。権馬は薩藩の重臣と単独あるいは福岡(藤次)と同行で会っています。

十二月廿四日 晴薩の吉井幸助ヲ訪

(廿五日に中岡が「吉井に至り策を談す」)

一月六日 陰昼比方薩人西郷吉之助を訪逢藤次同行至上々

一月十一日 陰西郷吉之助を訪ふ

一月十六日 雪気吉井来晩方梅亭江行藤次同行

一月廿日 陰少々日光有リ西郷吉之助吉井幸助来訪廿三日

出足ニ付為晦迄也

一月廿一日 晴曇比方西(*郷カ)江吉井方行藤次同行帰路

三本木至(*三本木 料亭)

二月三日 晴薩人大山格之助来訪

二月十一日 晴薩人大久保市蔵ヲ訪夕方會

二月十六日 晴小松帯刀ヲ尋ル不遇大久保二行大洲藩窪田省

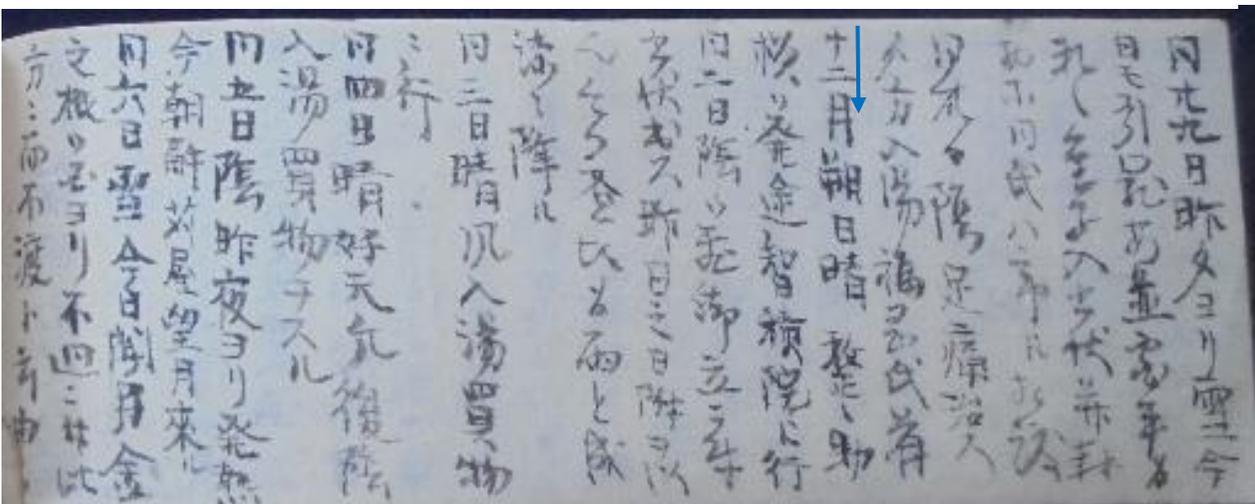
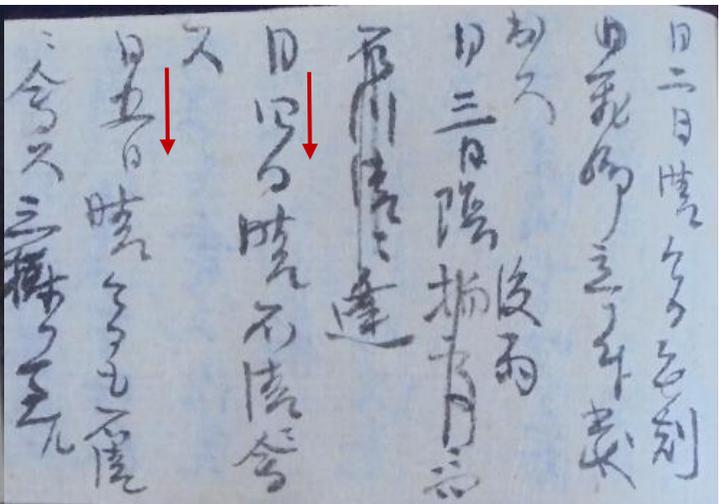
吾寺島廉之助来

二月廿一日 陰夕方雨と成大久保市蔵来訪

三月十七日 大久保一来

一月下旬から二月下旬までの一ヶ月間に薩摩藩の重臣と度々会っています。確証はありませんが、薩土密約の打ち合わせではないでしょうか。

土佐藩の重臣は他藩の軽格の士と会うことはあったのだろうか。他藩は既に土佐の上士、下士、郷士の体制が崩れて、身分に関係なく優秀な人材を徴用していた。徴用されはた人材が重臣となり、逢い易い環境ができていたのだろう。逆に渋谷雅之著土佐藩重臣日記(上)で寺村左膳道成の文久三年九月廿一日の日記



「・・・守旧党御登用ニ付、其節近族へ御預ニナリシ所、八月十八日ノ変ヨリシテ益浪士之党勢ヲ失ヒ、御国許モ追々御取調へノ廉アルヲ以テナリ、是レ天下一般ノ勢ナリ」と日記にありその「一般之勢」の著者の注で「八・一八政変の後、大和拳兵の志士たちは鎮圧され、尊攘激派は一挙に勢いを失った。文久三年正月の状況以来容堂の胸の内にあつた軽格志士の憎悪は、政変により現実の政事として姿を表す。」とあります。土佐の勤王志士は郷士などの軽格が多く処罰されたのでしょう。これが藩政であれば、他藩の軽士と会うことはなかったと思います。

* 八月十八日の政変 天皇の側近・久邇宮朝彦親王(くにのみや あさひこしんのう)、薩摩藩、会津藩らにより起こされた政変で、京都から長州藩が追い出され、尊王攘夷派の公家七名に対し、追放処分が下されます。

安岡権馬正徳傳 貳 の終わりに

京都での生活

京行雑記の記載から、権馬の京都生活のトピックスを拾い次に示します。

・入歯

慶応三年二月十二日 晴風 歯ヲ抜入歯を頼ム 藝ノ船越ヲ尋ル

(費用) 老歩 入歯

インターネットで検索すると江戸時代の入歯は仏師の技術を採り入れたようです。黄楊などで手造り、現在と同じように微調整し作成したとのことです。日記に入歯を受取ったとの記載がないので、権馬は歯が抜けたままの状態で明治維新を過ごしたのだろうか。日記に下痢、心の下痛む、足痛む(脚気カ)とか出て来ますので、体は剛健ではなかったのでしょうか。

・写真

慶応三年一月廿三日 陰朝入湯晩方写真ヲスル

(費用) 三歩 写真

慶応三年一月廿四日 陰朝暴白口傳奏の為家へおル天気ニ向ヒ使者へ八ツ比方写真ニ行

(費用) 老歩二朱 写真

中岡慎太郎は慶応二年十一月に写真を撮っています。暗殺された後、どこかに写真が残っていて家に送り届けたのか、写真屋に残っていて発見されたのか。同じように権馬の写真がどこかに残っていないだろうか。だが、顔が分からない見せられても判別できないでしょう。

・下駄

京都に到着早々に購入しています。

慶応二年十一月廿六日 老朱ト三百文 下駄

慶応二年十二月八日 三朱 サシ下駄

土佐では郷士は下駄は高値の花のためか、下駄を購入しています。恒之進も江戸から七足も買ってきています。平尾道雄著「土佐藩工業経済史」によると下駄は天保年間に小高坂の人が江戸製に模して製作とあります。当時の道路事情を考えると山北付近では履くことはなく、お出掛け衣装だったのだろう。

・馬

慶応二年十二月七日 雪朝馬ヲノル 昼ヨリ白川邸見分ニ行

土佐では郷士は通常、馬に乗って出掛けることはできません。京都で馬に乗り出掛けています。雪の日に乗馬が珍しく乗ったのだろうか。

右記からはどこまで行ったのか不明ですが、街中で乗ったのでしょうか。

・白川邸

右の記載では馬に乗って白川邸まで行ったかは不明ですが、これ以外に権馬は白川邸に見分に行ってます。道中日記に出て来る北廷は北川白川邸と推測しました。白川邸は大坂の藩邸を移築し陸援隊の屯所となりました。現在、京大の地所で、建物建設で発掘すると棧が右と左がある土佐の瓦が出て来て、土佐以外では見られない瓦先端に彫られた屋号の拓本(下写真 京大尊攘館の資料から)が紹介されていました。そこに今回の山北の家の解体で確認された瓦と同じ屋号が三瓦ありました。

「ア?」キ卯年」…上段 左より 四番目

「中友」 …下段 左より二番目

「中山林」 …下段 左より三番目

これ以外に山北近辺の佐古、葦生などの瓦が多くあります。

・陰な天気 暴白

正月四日 晴京地ニハ弥敷好天気夕方丸山江行藤次同行

正月五日 陰醫(*様な字躰カ)気雨ヲ催ス

正月廿四日 陰朝暴白

権馬の日記を見ると天気に陰の文字が多いです。道中日記は四月から十月までの暑さになれた高知人には耐えられる天候だったのか、暑い時の天候に関する記載は少ないです。冬の時期なので陰、雪、高知でも時々ありますが、その天気が続き、厳しい寒さ、陰な天気、権馬はつらかったです。晴の嬉しさ、山北の温暖な晴れ間が恋しかったのでしょうか。最悪は前述しました吹雪の凄さでしょうか。それは「暴白」の言葉に出ています。

・買物

十二月十二日 式刃一分二朱 フランケツト

十二月廿五日 式朱 經濟録

福岡藤次の金を預かっていたようで自分で購入したか不明です。「フランケツト」ブランケツト＝毛布でしょう。もう一つ本「經濟録」著者は大宰春台(1680-1747)でその主著が『經濟録』(1729享保十四年)です。それに関連する出版もありその内容について京大の論文となっており、私には説明はできませんが、何故、権馬がこの本を買い求めたか大いに気になります。

安岡権馬正徳傳 参へ 續く

安岡の家住宅<<http://yasuoka-ke.sakura.ne.jp/>>

↓安岡の家にあった文書

↓●安岡権馬正徳傳

↓●安岡権馬正徳傳 参

PDFを検索

